

第 I 部 記念研究会「内田義彦が遺したもの」序

<開会挨拶>

事務局長 泉 武 夫

ただいまから「内田義彦が遺したもの」というテーマの研究会を始めたいと思います。

私は当研究所の事務局長をやっております泉と申します。社会科学研究所創立40周年記念集会ということで、第1部記念研究会、第2部記念パーティを計画いたしました。記念研究会を始めるに当たり、事務局から一言御挨拶申し上げます。本日は土曜日で、皆さん予定がいっぱいのところ、わざわざ時間を割いていただきまして、ありがとうございました。もともと、『内田義彦著作集』が刊行中に社研の内部で一度シンポジウム形式の研究会を開いたらどうかという自然発生的な声がありました。それが、この度、こういう形で40周年記念研究会という形で実現したことを、たいへん嬉しく、関係者各位にお礼申し上げたいと思います。特に、今日、報告を快くお引受けいただいた先生方、討議司会者にお礼を申し上げます。それでは、研究会を始めたいと思います。では、司会を当研究所の所員であります常行敏夫さんをお願いします。よろしく。

<司会挨拶>

常 行 敏 夫

本日の研究会の司会を務めさせていただきます所員で経済学部教員の常行であります。学外のかたがたも含めて、これだけ大勢の研究者が集まった研究会の司会ということで、たいへん荷が思いのですが、文字通りの進行係に徹しさせていただくという条件で引き受けましたので、そうさせていただきたいと思います。行き届かない点が多々あると存じますが、皆様の御寛容を予めお願いいたします。

専修大学だけではなく、広く日本の社会科学界にとっての宝でありました内田先生は、皆様御存知のように昨年3月18日に他界されました。既に1年と4ヵ月の月日が流れてしま

ったわけです。その間に、学史学会の関西部会、関東部会などで、内田先生を追悼する記念研究会が開かれたと聞いております。内田先生と縁の深い、専修大学、とりわけ当研究所でも記念講演会を開催しようとの動きは早くからあったのですが、専修大学が学史学会の幹事校を引き受けていたという関係で、主要なメンバーが多忙であったことと、内田先生の『著作集』が完結してからとの声もありましたので、やや遅れましたが本日の開催となったわけです。また、先生が共同研究の場として大切にされていた当研究所が40周年、厳密には41周年のようですが、を迎えたことをも記念する意味で、本日の講演会の主催を当研究所が行なうことになったわけです。

この研究所が41年前に発足後、まもなく休眠状態に入るという不幸を経験した後に、1963年に故山田盛太郎氏を所長として再発足して現在に至っているのですが、内田先生はその再発足の時から専修大学退職直前の1982年12月まで運営委員および総合理論部門の部長を務め、長い間、当研究所の研究活動を指導されました。そのような内田先生と当研究所の関わりを象徴するのが『著作集』第8巻に収められている「作品への遍歴」であると思います。これは先生の『作品としての社会科学』が1981年度の大佛次郎賞を受賞したことを記念して当研究所が開きましたシンポジウムの記録であります。御存知のように、『作品としての社会科学』は結局は内田先生の命を奪った食道ガンの手術後に、先生が遺言のようにして渾身の力を込めて執筆されたものでありますが、その作品を、今は中年を越えようとしている当時の若手研究員が、どう読んだかということの内田先生に語り、先生が、あの痩せ細った身体をおして数時間にわたってそれに答えてくださった感動的なシンポジウムでした。ぜひ読み直していただきたいと思いますが、その中で、内田先生は所員の一人の質問に答えて、学問的継承とその乗り越えということについて熱っぽく語っておられます。その要諦は、「全面的没入と全面的拒否」という、例によって内田先生らしく謎めいた矛盾的な方法であります。およそ10年を経て、当研究所は再び先生のお仕事についての研究会を開くことになったのですが、答えてくれる先生は、もういません。私たちに遺されたのは『著作集』全10巻に凝縮されている先生の学問と思想を、未曾有の変革の時代の中で継承し、乗り越えるという途方もない課題であるわけです。私たち自身が先生のお仕事に対する全面的没入と全面的拒否を他ならぬ先生に迫られているということでありましょう。

この課題は内田先生流に言えば、それぞれの研究者が、それぞれの創造活動を通して追求すべきことではありますが、今日は分野を異にする3人の方々に「内田義彦が遺したもの」について語っていただきたいと思います。まず最初に当研究所所員で経済学部教員の吉澤芳樹先生に「内田義彦の学問世界——『日本から日本へ』の経済学史研究」というテーマで報告

していただきます。吉澤先生が専修大学での内田先生の後継者であることは皆さんが御存知の通りであります。

次に東京外国語大学名誉教授の長幸男先生に「内田義彦と日本の経済思想像」というテーマで報告していただきます。長先生は、東京外国語大学に移られる前は、専修大学に所属されておりました。再発足した当研究所の初代事務局長を務められました。また、外大に移られてからも当研究所の所外研究員として研究活動を継続してこられたわけです。長先生は、実は長い間の病氣療養後のお身体であるにもかかわらず、本日の発表を快く引き受けてくださいました。厚くお礼申し上げます。

最後に、ここで The Last but not The Least という言葉をつけ加えておくべきでしょうけれども、当研究所所員で法学部教員の小沼堅司先生に「社会主義と市民社会——内田義彦氏の所説に触れて」というテーマで報告していただきます。小沼先生は政治思想史の専攻ですが、ロック、ヒューム、スミスなどのイギリス経験論についての研究と J. S. ミル論、それから日本思想史研究などで内田先生のお仕事と接点を持っておられます。本日は、社会主義圏の激変をまのあたりにしてきた体験に基づくリアリティのある報告が期待されると思います。なお、小沼先生は『作品としての社会科学』をめぐるシンポジウム、つまり「作品への遍歴」ができた、あのシンポジウムですけれども、そこで内田先生に質問した若手所員の一人でありました。他人ごとではありませんが、先生のお姿に 8 年の年月の流れを感じます。それでは、3 人の先生方、よろしく願いをいたします。